

## ● 制作

## 地の記憶を辿る

## —旧利根川の流路に基づく、取手の河川敷空間の再構築—

越田 真代

園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム (主指導教員: 章 俊華)

KOSHIDA Mayo

## 1. 研究の背景と目的

かつて川は、人の生活や生業、文化と深く結びつき、まちの成り立ちそのものを支えていた。1964 年に開催された東京オリンピック以降、国民の健康促進を目的として、全国各地の河川敷に多くの運動施設が整備されてきた。茨城県取手市に位置する取手緑地運動公園には、野球場やテニスコートなどの運動施設が設置されている。これらの施設は一見すると多くの人々が利用可能な公共空間として機能しているように見える。しかし実際には、野球場などの特定の利用行為を前提とした施設が河川敷の広範囲を面的に占有しており、結果として利用者が限定されている。つまり、河川敷はまちと川を隔てる境界として認識されている。

このような背景を踏まえると、河川敷は本来有している自然環境や多様な利用可能性を十分に活かしきれていない。そこで本研究では運動施設の整備で完結せず、多様な人々を受け入れる、川とまちを繋ぐ新たな河川敷の空間のあり方を提案する。

## 2. 方法

本設計対象地は茨城県取手市の南に位置する取手緑地運動公園と利根川を挟んだ対岸に位置する小堀地区の河川敷である。文献調査と現地調査により川とまちの成り立ちや関係性を調査し、それらの結果を設計の基盤資料とした。

## 3. 調査

## (1) 土地の歴史

かつて利根川では洪水が頻繁に発生していたため、江戸時代に大規模な利根川の改修が行われた。それにより、地続きであった取手市小堀地区が利根川によって分断された。その後、改修によって交通の不便を感じた小堀地区の住民が自ら渡し船を出し始めたのが、今の小堀の渡しである。

## (2) 植生調査

調査対象エリアは、取手ふれあい浅橋、小堀、取手緑地運動公園駐車場前の三つに区分した。移動は「小堀の渡し」で移動し、各エリアにおいて植生の観察を行なった。調査方法としては、現地で植物の写真撮影を行い、後日文献やインターネット<sup>(1)(2)</sup>を用いて科名・種名・原産地・群集クラスを特定するものである。なお、人為的に植栽された樹木、果樹、花卉類は対象から除外した。調査は 2025 年 8 月 24 日 (日) の 9 時 40 分から 11 時 40 分にかけて実施した。ただし、船

の運行時間により各エリアでの滞在時間には差が生じている。本研究では、「堤防法面植生管理マニュアル (案) (昭和 62 年 2 月、建設省北陸地方建設局監修)」<sup>(3)</sup> に示された堤防法面植生の評価基準を参照し、現地調査の結果を踏まえて各群落の評価を行なった。

植生調査の結果、草本類のうち北アメリカ原産の植物が全体の約 2 割を占め、さらに特定外来生物および要注意外来生物の半数以上が北アメリカ原産であることが明らかになった。このことから、外来種の繁茂により、在来種の生息環境が脅かされる可能性が高いと考えられる。

よって、取手市河川敷における植生の現状は、在来種保全と治水機能、環境機能の観点から改善の余地が大きいと言える。設計においては、在来種の割合を増加させるとともに、環境機能と治水機能を高めることが求められる。

群落・群集名	識別種・構成種 (赤字は新たに植栽するもの)	環境機能	治水機能	経済性
チガヤ・ヒメジョオン	チガヤ スギナ ヘクソカズラ シバ フレモコウ ネコハギ スズメノヒエ アオスゲ オッチチカタバミ	3	2	2
ススキ	ススキ メヒシバ スイバ チガヤ	3	2	3
シバおよびコウライシバ	シバ メヒシバ	2	3	1
ヨモギ	ヨモギ カワラヨモギ ヒナタイノコヅチ アキノエノコログサ ネズミムギ	1	2	3
オギ	オギ ヘクソカズラ ヨモギ	1	2	3
イタドリ	イタドリ メヒシバ ヤブガラシ ヒナタイノコヅチ アキノエノコログサ	1	2	3
アキノエノコログサ・メヒシバ	メヒシバ スギナ	1	1	2
カラムシ	カラムシ ヤブガラシ メヒシバ アキノエノコログサ ヨモギ	1	-	3
クズ	クズ ヘクソカズラ ヨモギ イタドリ	3	3	3
ヨシ	ヨシ メヒシバ アキノエノコログサ メヒシバ	1	-	3

表 1: 「堤防法面植生管理マニュアル (案) (昭和 62 年 2 月、建設省北陸地方建設局監修)」より引用

